

ムーンメモリア・ロストノイズ
十七話…積まれた本の高さ

雨和七瀬

買い物を終えた二人が店を出ると、ユノが食べ物の包みを幾つも持って待っていた。

「よお、こっちは美味しいもん見つけたぜ。そっちはどうだ？」

ユノは先にサンドイッチを一つ頬張りながら、ルークに包みを差し出した。ルークは一つ受け取りつつ「口に物を入れながら喋るな」と、ユノの振る舞いを咎めた。

「ブランカにはまず読み書きを覚えるために何冊か本を買った。他はまた日を改めて揃えるつもりだ」

ユノは「へえ……」と相槌を打ちながら、ルークの後ろに居るブランカを覗き見た。ブランカが背後でもぞもぞと動いているのが外套越しに伝わってくる。

「……何かあったか？」

「……いや何も」

ユノの視線にルークは思わず目を逸らしてしまった。恐る恐る視線を戻すも、追及からは逃れられなかった。

「……魔法道具の衝動買い」

ルークは完全に読まれていることを悟られないように頭巾を被り直したが、それもまた凶星であることを知らしめてしまった。

「オレには『無駄遣いするな』とか言うくせに。ブランカ、今度からルークがこーゆー事したら言えよ」

「……ひゃい」

ブランカは舌が回りきっていない声を絞り出していた。宿に帰り着いた頃にはブランカはいつもの調子でユノに買い物の内容を話していた。

「……それで、『また来ます』って言ったらこれをおまけとして貰ったんです」

ブランカは自分で抱えていた本をユノに見せた。

「太っ腹な店だな、えーと……『旅に役立つ基礎魔法？』

「はい、旅人におすすめの『まどうしょ』だそうです」

ブランカは魔法書を開いて机に置いた。ユノがそれを覗き込んで勝手にパラパラと捲りつつ、書かれている内容を讀み上げた。

「旅を楽にする、百の魔法と百の知恵……へえ、便利そうだな」

ユノの言葉にルークは眉根を寄せた。

「これと同じ内容の教本が兵士には配られているはずだが……読んでいないのか？」

ユノは目をパチククリとさせ、「そんなのあったか？」と返した。

「……俺がブランカに文字を教えている間に読んでおけ」「ええー……」

ユノはあからさまに嫌そうな顔をしたが、自分で「便利そう」といった手前、渋々とその本を持って寝台に腰かけた。それを見届け、ルークはブランカの方を向き直す。ブランカは既に先ほど買ってきた大陸文字の教本を広げ、硬筆を手を持って待っていた。

「じゃあまずは……そうだな、この表で文字の読み方を覚えるところからだ」

聞くこと、話すことは申し分ないブランカに読み書きを教えるのは半日あれば十分。そう、ルークは考えていた。しかし。

「なんでこれ『ジ』って読むんですか。『ザ』と子音が違うじゃないですか」

「……これも記述式魔術の誤読、誤記を防ぐためだ」

「大陸語、例外多すぎませんか！ その割に拗音は他の字を後ろに付けるだけって雑ですし！」

自分の使っている言葉に対して例外が多いということ、ルークは今まで考えもしなかったが、ブランカの意見を認めざるを得なかった。

「むむ……」

ブランカは文字表を凝視していたが、大きなあくびを一つし、瞼を擦った。何度か瞬きを繰り返すたびに、段々と目が閉じていく。

「……今日はその辺で良いんじゃないか？」

ユノは丁度良いと言わんばかりに『旅に役立つ基礎魔法』を閉じて起き上がると、ブランカの頭を撫でる。ルークがそれに賛同しかけたが、ブランカの答えは違った。

「まだ……やりまふ……」

しかしどう見ても疲れが出ているブランカの姿を見て、ルークは今日手に入れた魔法道具の存在を思い出した。

「なら『耐眠の腕輪』を試してみるか。取って来よう」

ルークはすぐに自分が寝る部屋まで上がり、鞆から腕輪を取り出し、少し早足で戻る。ルークが二人の部屋の扉を叩くとゆっくりと開き、ユノがいつになく静かに出迎えた。

「……寝ちまった」

中に入ると、机に突っ伏すブランカの姿があった。背中がゆっくりと上下していたが、顔だけ前に向けて片目だけ開けた。

「んあ、おきます」

ルークの姿を見てブランカは体を起こそうとしたが、途中で息を吐くのと同時にまた溶けるように机に張り付いた。

「……」

ルークはその様子を見ていたが、寝息が聞こえてくる
と持ってきた腕輪をしまった。陽は暮れているものの、
まだ寝るには早い時間。

「……ユノも休むのであれば俺は部屋に戻るが」

「いや、一回寝たからまだ冴えてんだよな」

そう言いながら、ユノはブランカをゆっくりと抱え上
げ、寝台に寝かせた。その拍子にまた意識が起きたのか
もぞもぞと動いていたが、寝具に包まれてまた脱力して
いった。

「腹減ったし、隣の酒場にでも行こうぜ」

「ひとりで行け、俺は行かない」

ルークは机の上を片付けながらピシヤリと言い放つも
間が悪く思い出したように腹の虫が鳴る。それはユノに
も聞こえたようで、逃がすまいとそつと肩を組んできた。
「別に酒を飲めってわけじゃねえよ、ただ飯食いに行こ
うってだけでさ」

そう言ってルークが連れて行かれた先で酒に酔ったユ
ノに飲まされそうになった事は枚挙に暇がない。ルーク
は腕輪を取り出し、ユノに押し付けた。

「うおわっ」

腕輪から発せられる微弱な雷にユノが驚いた隙にルー
クはユノの腕を払い、本を抱えて部屋の入り口に向かっ
た。ユノはまたルークに手を伸ばしかけたが、ゆっくり
と自分の頭に引き寄せた。

「……しゃーない、一人寂しく晩酌してくっかな」
ユノも軽く荷物を持つと、ルークと共にブランカの眠
る部屋を後にした。

ルークは自分用の部屋に戻り、持ってきた本を机に置
いて椅子に腰かけると、一番上の一冊を手に取った。

（歴史について簡単に纏められた本か。ブランカの記憶
の頼りになれば良いが）

ルークはそれを自分の目の前に置くと、手袋をはめた
手をかざす。

（全部を読んで理解する時間は無い。ここは『解析』で
……）

ルークは掌に意識を集中させる。呼吸を整え、目を閉
じ、魔力を本に染み込ませるのを想像する。すると、本
に書かれている内容が意識の中に流れ込んでくる。目を
通して読むのに比べて十分の一の時間で一冊の本を解析
し終えると、ルークは一息ついた。

（解析魔法……やはり属性に頼らない魔法は体力が要る）
水差しの口を杯へと傾け、一気に飲み干す。冷たい夜

の風に体温を持っていかれないためにも、額ににじんだ
汗を手早く拭う。そして次の一冊に手を伸ばした。

同じことを繰り返し、ルークは最後の一冊である魔導
書を手に取った。魔導書であれば新品ではないのも珍し

くないが、やけに古びており、裏表紙を開くと数字の落書きが残っていた。

（一一〇四……買った年か、管理用の番号だろうか。学院の図書館もこんな風を書いてあったな）

ルークは先程までと同じように手をかざす。目を閉じ、本を思い浮かべると、他とは違い魔力を帯びていることまで手に取るように把握できた。これもまた魔導書であれば元の所有者、著者の魔力が残留するのも珍しくない。気を取り直して、精神を集中させた。内容が頭の中に浮かんで染み付いていく。その中で魔力の残滓から発せられた声が頭をよぎる。

『……見つけた』

ルークは思わず目を開いた。それと同時に解析魔法は途切れてしまった。しかし驚愕するだけの理由があった。

「これは、クリスの……」

聞き覚えがある、友人の声。

（魔導書を集めるのが趣味だったな。ではあの落書きも……彼ならやりそうだ）

かつての友人を思い浮かべるが、十年も経った今ではどんな姿になっているか、ルークには想像もつかなかった。物思いに耽っていると、戸を叩く音がした。

「入るぞー」

声の主、ユノはルークの返事も待たずに入ってきた。ルークは眉を顰めながらも、鼻に入り込む香辛料の効いた匂いに気付いた。

「お届けもんだぜ〜」

酒で頬の染まったユノは眦を下げ、手に持っていた包みを机に置いた。

「どーせまだ食ってないだろ？ 肉を串焼きにしてもらったんだ、一緒に食おうぜ」

ユノは勝手にルークの座っていたのと反対側に座り、包みを開いて一番大きそうな肉の付いた串を頬張り始めた。ルークは急いで本と手袋を鞆にしまうと、上の方にあった串をつまんだ。包んでもらってからすぐに持ってきたのか、まだ焼きたての熱さを感じる。

「……ありがたく頂こう」

息を吹きかけると湯気が散っていく。その先で、ユノは機嫌よく串の先で宙に円を描く。鮮やかな夕焼け色の瞳がルークの視線を捉えた。

「さっきまで本読んでたみたいだけど、あれ全部読むつもりか？」

単純な疑問というよりは、根を詰め過ぎないように釘を刺す言葉だった。

「……今日だけでは無理だと思って、解析魔法で一通り把握しておいた」

「……魔法ってマジで便利だな」

ユノは持っていた串を杖のように持ち直し、縦に振る。
「兄貴もルークも魔法が使えて、オレが使えないなんて変な話だ」

ユノはもう片方の手で次の串を握る。まだ熱いの口いつぱい頬張り、反射的に仰け反って串を離す。ルークは水を注いだ杯をユノに渡した。ユノは熱さに震えながら受け取り、水を口に注ぎこんでいく。

「……あんふあと」

「口に物を入れながら喋るな」

ルークはいつものようにユノのがさつな振る舞いを窺める。しかしユノはふふんと鼻を鳴らし、上機嫌なままであった。ルークはそれを気に留めることなく会話を続けた。

「今からでも遅くない、俺が教えてやろうか？ 三昼夜もあれば一つくらい使えるように……」

「いや、エンリョしとく……何笑ってんだよ！」

ユノに言われてハツとし、ルークは咳払いで誤魔化して話題を変えた。

「そう言えば……あの魔導書、どうやら前の持ち主が俺の知り合いのようだ。残っていた魔力から声が聞こえたんだ」

ユノはルークが早口になっているのを、串焼きを冷ましながらか聞いていた。興味を持ったのか、目は変わらず串焼きを口にするルークをじっと見ている。

「世間って狭いな。知り合いつて、どんな？」

「学院に居た頃の同居人だ。当時の手紙にも何度か書いたが……」

ユノは思い出そうとししばらく頭を捻り、思い出せたものを絞り出した。

「下宿先に住んでて、魔導書を集めてるおチビ……だったけ？」

「ああ。とはいえ、幼かったクリスマスももう成人する頃だ」

「んじゃあ、ブランカと歳が近いんじゃねえか？ そんな奴が十年も前から魔導書が好きなのか、すげーな」

ブランカの年齢というものをルークは失念していたが、ブランカの今置かれている境遇に思いを馳せる。

（ブランカは不満を口にしつつも、筆の持ち方、姿勢は良かった。一度は言葉を学ぶ機会があったのだろうか。なら、この大陸のどこかには、彼女の帰る場所が……）

真剣に考えこむルークの顔を、気が付けばユノが覗き込んでいた。ルークが気付いて目を合わせても、彼女は

ルークが話し出すのを待っている。

「……ブランカにも『興味』という素養は十分にある。いつまでの付き合いになるかは分からないが、きつと多くの事を学べるはずだ」

それを聞いたユノは表情を和らげ、椅子にもたれかかると息を吐いた。そしてまた、ルークの落とした視線を掬うように目を向ける。

「そーだな。ブランカのためにやれることは全部やってやりたいもんだ。今はルークだってそう思ってたんだろ？」

「……さあな」

ルークは短く答えを返すと、黙々と食事を口に運んでいった。ユノはその返答に満足したようで、酒に酔った者らしく部屋を歩き回ったり座って串焼きをまた食べた。……そうしているうちにルークの借りた部屋にも拘らず、気が付けばユノは寝具に包まれて寝息を立て始めた。「……『ブランカのためにやれることは全部やりたい』か」

ルークは階下で独り眠る少女を想う。欠けた部分を補うように強さや知恵を求める姿に、期待と憂慮の入り混じった吐息が部屋に溜まっていった。

〈十八話へ続く〉